

『まよいマイマイ』収録  
『化物語(上)』収録

ゾンビのような足取りでベンチにまで戻った。

「話しかけないでください。あなたのことが嫌いです」  
「……………」

「よっ。どうした、道にでも迷ったのか？」  
女の子は振り向いた。  
ツインテイルの、前髪の短い、眉を出した髪型。利発そうな顔立ちの女の子だった。  
女の子——八九寺真宵は、まぎじつと僕を、吟味するように見て、それから口を開いた。

「わたしのような立場の者から言わせていただければ、両親がちゃんといらっしゃるといっただけで、阿良々木さんのことが、羨ましいです」  
「そっか……」  
「羊の下に次と書いて、羨ましいです」  
「そっか……それ、両方微妙に間違ってるからな」

四字熟語ならばなんてことのない普通の言葉なのに、下半分を削るだけで、そこまで圧倒的に侮蔑的な言葉になってしまうのか……僕は今まで、なんて言葉を平気で使ってきたのだろう。

「とにかく落ち着けて。別に僕はお前に危害を加えたりしないよ。この町に住んでいる人間で、僕くらい人畜無害な奴なんて、一人もいないんだぜ？」  
さすがにそんなわけはないだろうが、こいつを相手にする場合は、これくらい誇張しておくくらいで丁度いいだろう。子供に限らずこういう手合いには、与しやすいと思わせておいた方が得策だ。八九寺は納得したのかどうか、むう、ともつともらしく唸って、それから「わかりました」と言った。  
「警戒のレベルは下げましょう」  
「そりゃ助かるよ」  
「では、人畜さん」  
「人畜さん!? 誰のことだ、それは!？」  
「うわあ……」

「悪いが、僕は寸足らずの女の子に興味はないんだ」「寸足らず!」  
その言葉に、目玉が飛び出そうなるほど瞳目する八九寺。そしてくらくらと、貧血のように顔を揺らす。  
「なんて侮蔑的な言葉でしょう……将来的に規制されてしまえばいいから、酷い言葉です……」  
「言われてみれば、確かに、そうだな」  
「わたしつ、とても傷つきました。発育はいい方なんです、本当です!! 全くもうっ、人畜さんは酷いことを言いますっ」  
「人畜さんって、お前も思い出したみたいに言ってるじゃねえよ。どっちかっつていえば、そっちの方が先に規制がかかりそうじゃないか」  
「では、人チックさんと言いましょ」  
「本当は人じゃないみたいじゃないか!」  
ていうか、吸血鬼に襲われて半分不死身みたいな僕にそれを言うと、本当に洒落にならない。あまりにも的を射過ぎている侮蔑言葉だった。

「まよいマイマイ」とは

母の日に妹と喧嘩をし、逃げるように家を抜け出した層は、町内の浪白公園で、大きなリュックサックを背負った小学5年生の少女、八九寺真宵と出会った。道に迷っているらしい彼女に声をかける層だが、何故か「話しかけないでください」とすげなく拒絶されてしまう。それでも、しつこく食い下がる層は、真宵が、離婚して家を出て行った母の家を探していることを聞き出す。そこで層は真宵から目的地の住所を聞き、彼女を案内してやろうとするのだが、どうしてもたどり着くことができない。それはどうやらある“怪異”が原因らしいのだが……。

「ひたぎクラブ」とは逆に、コミカルな筆致で描かれたエピソード。真宵の子供っぽい性格と可愛らしい仕事とも相まって、非常に楽しい一編となっている。また「化物語」の魅力であるキャラクター同士のかけ合いが、本格的に描かれ始めた章でもある。

「ひたぎクラブ」とは

友達を作らず、いつも教室の隅で本を読んでいる、病弱でおとなしい少女。クラスの誰からもそう認識されている戦場ヶ原ひたぎの秘密を、阿良々木層は偶然にも知ってしまふ。階段から足を踏み外し、転落したひたぎをとっさに受け止めた層だが、ひたぎの体は有り得ないほどに……まるで体重が存在しないかのように軽かった。秘密を知った層の口を封じようとするひたぎ。自分に関わりようとする者すべてを敵と看做す彼女に、それでも層は力になれると告げ、自分もひたぎのように“怪異”に見舞われた人間だと明かすのだった……。  
層とひたぎの出会いを描いたエピソード。初登場時の、何者をも拒絶するひたぎの苛烈な言動は非常にショッキングだが、物語が進むに連れて彼女のユーモラスな面が見えてくる。また、後半でひたぎの家庭の事情が明らかになると、彼女が頑なに他者を拒絶した理由が理解できるようになる。

「そんなくだらしないことをよく知っているわね。生まれて初めてあなたに感心したわ」  
くだらないって言われた。  
生まれて初めて言われた。  
「なあに、僕は天文学や宇宙科学には詳しいんだよ。一時期熱中したことがあってね」  
「いいのよ、私の前では格好つけなくとも、もう全部わかっているんだから。どうせそれ以外は何も知らないんでしょう?」  
「言葉の暴力って知ってるか」  
「なら言葉の警察を呼びなさいよ」  
「……………」  
現実の警察でも対処できない気がした。

「沈黙と無関心を約束してくれるのなら、二回、頷いて頂戴、阿良々木くん。それ以外の動作は停止させ、敵対行為と看做して即座に攻撃に移るわ」  
僕は、選択の余地なく、頷く。  
二回、頷いてみせる。

「もしもあなたが私を騙し、こんな人気の無い廃墟に連れ込んで、ホッチキスの針で刺された件で仕返しを企んでいるというのなら、それは筋違いというものよ」  
「……………」

いや、筋はものすごく合っていると思う。  
「いいこと? もしも私から一分おきに連絡がなかったら、五千人のむくつけき仲間が、あなたの家族を襲撃することになっているわ」  
「大丈夫だって……余計な心配するな」  
「一分あればここのボクサーかよ」  
「僕はどこかのボクサーかよ」  
ていうか躊躇無く家族を標的にしやがった。とんでもない。  
しかも五人って、大嘘つきだった。  
友達のない身で大胆な嘘である。  
「妹さん……二人ともまだ中学生なんですってねえ」  
「……………」  
家族構成を把握されていた。  
嘘ではあっても冗談ではないらしい。

「そう、私には——重さがない」  
体重がない。  
「といつても、全くないというわけではないのよ——私の身長・体格だと、平均体重は四十キロ後半強というところらしいのだけれど」  
左頬が内側から伸ばされ、右頬肉が圧迫された。  
「……………っ!」  
「変な想像は許さないわよ。今私のヌードを思い浮かべたでしょう」

『化物語(上)』収録  
『ひたぎクラブ』

